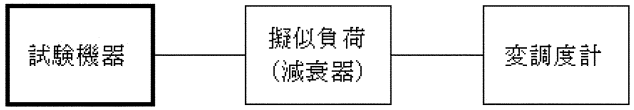
2　測定器の条件等
標準信号発生器から、制御信号周波数よりも32kHz高い周波数
903.0125MHz＋32kHz＝903.0445MHz
で、振幅が制御信号よりも10dB程度低い信号を変調度計に加えておく。
3　試験機器の状態
待受け状態にしておく。
4　測定操作手順
⑴　コンピュータの指令でＰＴＴスイッチをＯＮにして、発呼し、制御信号を送信する。
⑵　コンピュータの指令で、制御信号のビット同期開始から170msの時点で数ms間のデータをデジタルメモリに取り込む。
⑶　コンピュータにより、デジタルメモリのデータの（＋）側周波数偏移尖頭値を抽出し、正しい周波数偏移に変換して、記憶する。
⑷　（－）側の周波数偏移の測定は、⑶と同様の操作を行う。
5　試験結果の記載方法
⑴　周波数偏移の最大値について、（＋）と（－）側をkHz単位で記載する。
⑵　必要があれば両側の平均も記載する。この値は、上の値の算術平均とする。
6　その他の条件
変調度計に予め信号を重畳しておく理由は、無信号時の雑音と信号入力印加時の過渡変動を抑圧するためである。

十一　周波数偏移⑵　その２（ピークホールド法）
1　測定系統図



2　測定器の条件等
変調度計の検波モードをピークホールドにする。
3　試験機器の状態
指定のチャネルに設定する。
4　測定操作手順
⑴　ピークホールドを（＋）側に設定し、初期状態とする。
⑵　通話チャネルの送信を開始し、約２ｓ後、送信を停止して、送信停止時における制御信号の周波数偏移を測定する。
⑶　上の⑴及び⑵と同様な操作を行い、周波数偏移の（－）側の測定をする。
5　試験結果の記載方法
方法その１と同じ。
6　その他の条件
⑴　変調度計はモジュレーションアナライザを使用するが、測定される信号の入力後約２ｓ以上経過しないと測定動作に入らないので、上の操作手順をとる。
⑵　信号重畳法は制御信号の定常状態の値を測定し、ピークホールド法は制御信号の過渡時の尖頭値にも応答するので、同一供試機に対し、二つの方法の測定値が一致しないこともある。この場合、判定は信号重畳法の値を優先する。